
VRMMOのある日常

zeharen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VRMMOのある日常

【Nコード】

N2433BA

【作者名】

zeharen

【あらすじ】

俺、中学一年生、VRMMO始めました。

注意とか

*ノリと酔いだけで書いたので適当さ120%。

*パロディとか、むしろそのままとかある。

*不定期更新

*実はMMOやったことない、こんなゲーム有ればなあ妄想で書いた。モンハンもずっとソロだった。

*感想、アドバイスとか歓迎、誤字脱字指摘も同様。しかし直したり変更したりは確約できません。

*変な改行はメモ帳のでやっているため。言われたらそっちも対応したいです。

1 / 10 追記 なんか感想受付の設定を間違っていました。申し訳ありません、意見が言いたかった方は特に。誰でも気軽に感想ください。戦々恐々しながら待っています。

これらを理解してなお読みたいとお思になる勇猛な方は、少しでも楽しんでくれたさればうれしいです。

1話 誕生日とプレゼントと中学生（前書き）

導入部です。

そして縦横無尽にあたりを転げまわる。

「アーハハハハッ！！ イヒヒヒッ！」

まだ回る。

「ダーハハハハハッイテッ！」

ガツン！ 軽快な音を立てて石に激突。
頭に衝撃が走り、まだ転がる。

ちなみにこれは痛みで悶絶したためだ。

『ポーン！ スキル：【回転】を取得しました』

軽妙な電子音と共に無機質な女性の音声が脳内に響く。

「いたたた・・・回転？」

どうにか痛みから復活し、頭をすりながら指をぱちんと鳴らす。
すると目の前には自然な風景とは不釣り合いな電子画面が呼び出され文字や数字が羅列される。

【Name: シュウ:lv4】

【Skill】

棒術: 21

隠密: 17

回 転 : 1

【 Stamina 】

100 / 100

【 Arts 】

・ 三段付き

・ 大円

【 Ability 】

・ 沈黙

【 Potential 】

L I F 6 6 / 6 8

S T R 3 6

A G I 4 0

D E X 3 8

D U R 3 2

M A G 2 0

【 Your Title 】

Nothing

【 Equipment 】

頭 : 旅立ちの耳飾り [DEF : 3] [WEI : 1]

胴 : 旅立ちの衣 [DEF : 8] [WEI : 2]

腕 : 旅立ちの手袋 [DEF : 6] [WEI : 1]

腰 : 旅立ちの腰巻 [DEF : 5] [WEI : 1]

足 : 旅立ちの下履き [DEF : 7] [WEI : 2]

【Weapon】

E：鉄製の物干し竿「ATK：4」「WEI：5」

【Weight】

88 / 300

「ふむ」

装備とか能力がしょぼいのは仕方がない、そもそも序盤だ。

といつか見るのはそこじゃなくて【Skill】から【回転】の項目を選らんど。

指で直接タッチして操作。

すると今までの画面が消え別の画面に切り替わる。

【回転】

回ることに関する技術。回って回って回るが飛べない。

・・・何だこの説明。

試しに別のも選んでみる。

【棒術】

棒を操る技術。棒はいいぞ棒は！ なんとって武器が格安。

・・・どういう売り込みの仕方だ。

とつかそれしか利点無いかよこれ。

【隠密】

姿を隠へいする技術。気になるあの子に迫れ！

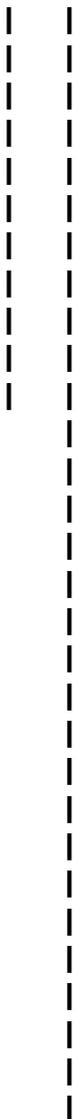
「いやそれは推奨しちやいかんだろー！」

思わず声に出して突っ込み。

しかしそれに反応するものはなく、目の前には湖が静かに波を立てていた。

とりあえずここで一言。

中道 なかみち 修 おさむ 中学一年、VRMMO始めました。



齢を重ねることは劇的である。

特に小学校から中学校へや中学校から高校へなど上級学校に進学する際には環境の変化はその先に人生において大きな意味合いを持つことが多い。

それはなぜかと言われれば出会いが増えるからだ。

学校内であった人の括りが地域、そしてもっと遠くからの人など今まで会ったことが無い人種と出会える。

それは万人の不安煽り、期待を膨らませる。
俺こと、中道 修にとってもそれは同じだ。

しかし俺はその日、小学校と中学校のいつどっちに帰属しているのか謎の春休みにもっとちがった人種と出会うためのツールを手に入れた。

『ハッピーバースデー！！ 我が愛しの甥っ子よ！ 中学生生活を楽しんでしまっているかい？』

4月4日、その日は一年に一度の俺の誕生日だった。

楽しみしてなかったかといえは嘘になる。

共働きで家を空けがちの両親もその日だけはいつも家にいて祝ってくれるし、いつもは自分の手料理だがその日だけは外食や、出前など自分の手を煩わせることもないからだ。

しかし不安が無かったとか言えばそんなことない。

理由はいま目の前の立体映像電話内で豪快に笑う叔父にある。

『おいおい、どうした？ 我が甥？ 引き攣った笑いが出てるぞ？
さては姉さんの料理を食ったな』

映像内の叔父はフツと息を吐き、俺の右隣でにこやかに映像を見ていた母さんを見る。

叔父、春上^{はるかみ} 正志^{まさし}は母さんの弟だ。

左隣でハラハラと映像と母さんを見ている父さんにとっては義理の弟にあたる。

『誕生日だからって調子に乗ったんだろ。 まったく姉さんのは昔から「正志、次のお盆にね？」・・・おほん』

右隣からの一声で叔父の咳払い。

俺はそこから発せられるオーラのせいで右を向けない。
左を見れば父さんが「ひいひい……」とか小さく悲鳴を上げている。
家族の力関係が一発でわかる図だ。

『あー、あーうん。とりあえず話を戻そう、誕生日おめでとう修。
そして今私が電話しているということはわかるね?』

「ええ、はい……」

映像の中で楽しそうに微笑む叔父に曖昧な笑みで相槌。

「ピンポン！ 中道さんお届け物です！」

同時に玄関から声。

すると映像内の叔父はその整った容姿を満足そうに歪め、笑う。

『そら届いたぞ。私のプレゼントだ』

嫌な笑いだ——————！！

心の中で絶叫するが表面上は愛想笑いを浮かべたままだ。
ここで下手を打てばもっとひどいことになるのは明白。
とりあえずは父さんが物を取ってくるのを待つ……

「修ー、ちょっと手伝ってくれー。一人じゃ持てん」

そんなにでかいもの送ってきたかよ!?

俺の叔父である春上 正志は【スプリング】というベンチャー企業
の若手社長だ。

ヴァーチャルリアリティ
特に新出産業であるVR機器事業をほぼ国内寡占状態。
雑誌とかでは新世代の傑物とか呼ばれているらしい。

叔父の年収だけで正直、我が家は十年優に遊んで暮らせる。

そんな彼の楽しみが甥である俺いじり。

イベントごとに俺を脅かそうとあの手この手尽くすので正直、うれ
しいのだが毎度有難迷惑であることが多い。

だってペットとか言って、アナコンダをプレゼントされてどうしろ
と。

将来の為とか言って許嫁作ってきたとかどうしろと。

お前のために専用アニメ会社つくったからどうしろと。

勿論すべて丁寧に処理した。

アナコンダは動物園へ、許嫁はそもそも俺が叔父さんの息子とか偽
ってたらしいので無しってことに（ちなみに俺は相手に会っていない
相手も俺も小4の時なのだ、ばかかっているとしか言いようがない）、
アニメ会社はネットで適当に意見調査して適当な作品を作らせた後は
放置している。今では立派に会社としてやっているらしい。
ともかくやることなすことめっちゃくちゃ。

当たり前だが今回の誕生日プレゼントにしても良い予感なんて微
塵もしない。

【スプリング運送部門】

「職権乱用してますね！ 叔父さん！？」

『あはは。 職権を今使わないでいつ使うと？』

いつでも使えるよ！

心で突っ込みを入れるがこれ以上長引かせると面倒だ。

こんなことで頭を痛めているなら、中学生活に思いをさせていた方がいい。

意を決して梱包の解体を始める。

つーか、ほんとでかいな・・・人とか入ってないよな・・・。
人身売買とかシャレにならんぞ。

いやそういうや最近、家庭用アンドロイドが売りに出されたっけ？
なんか犯罪臭がする奴、というか家事は好きだから下手に奪われてもあれだよなあ。

手を動かしても浮かんでくる不安を掻き消しながら梱包をすべて取り払ったそこには

「VR機？」

『そうVR機だ！』

俺の疑問を快く肯定し、叫ぶ叔父さん。

つーか声がでかいな。

『しかも最新式、名前は『アーヴァロン』だ！ 省エネかつコンパクト！ それでいて高スペックという我が社至高の新製品さ存分に夢の世界を楽しめるぞ？』

映像なの叔父さんが凄いドヤ顔で見てる。

一方の俺は思ったよりまともなので安堵を……？

「なんかまだ入っている？」

よく見れば奥の方に何か小さいものが見える。

小さいと言ってもVR機に比べればだ。

手に取ってみてみるとそれは

「ワールド・オンライン？」

ここ数年で広まったNDナノ・ディスプレイのパッケージ。

見た感じだとVRゲームみたいだけど……。

「もしかしてこれVRMMOってやつ？」

Massively Multiuser Online、これは多数のユーザーが一つの空間を共有することを指す。

転じてオンラインゲームのことを指し、特にVR機登場以降はVRMMOという完全に違った世界観で本物のような生活を送れることもあり、老若男女に愛されている。

仕事を定年退職した人の中には隠居の代わりにプレイしている人もいるくらいだ。

ちなみに当の本人たちからすればそうしているのは老人らしくない

らしい。

正直、俺たちのような老人は家でゲームをしているのが多いという印象が強い世代にすればよくわからない感覚だ。

ちなみに彼らからすればBDの200倍近く容量を誇るNDも化け物らしい。

『そうVRMMOだ。発売日が三日後の新作だぞ？ しかも我が社で全面バックアップしている』

叔父さんは意気揚々と声を上げ、胸を張る。

つか発売日前のとかいいのか。
というかそれ以前に

「俺VRMMOとかプレイしたことないんだけど」

興味が無いわけでは無いがどうしても時間を食ってしまうという性質上、家事一切を取り仕切る身としてはやれない。
というかそこまでしたいわけでは無い。

小学生時代はまわりでクラスメイトが話しているのを聞いたことがあるが、時間〓強さであるそうといった物に時間を割いてまでやるつもりはなかった。

それ以前にファンタジー世界とか、荒涼とした世界で他人とかモンスターとかと殺しあうのに楽しさを覚えられそうもない。

『何！？ 姉さんも義兄さんもVRMMO反対派か！？ 教育ペアレンツなのか！？』

VRMMOを完全禁止できている親は少ない。

そもそもが親世代である彼ら事態がゲーム世代であって、それを進

化させたVR系のゲームなど親子でプレイなどよく聞く話だ。大っぴらに推奨はしていないが、黙って見過ごすとかあまりに勉強に支障をきたすなら制限する程度だ。

「いや僕はそんなことしていないけど、学生時代はMMOにはまっていたし」

「私も別に。MMORPG時代は『近接治療師』とかいわれたものだったわ」

両親ともに肯定。

「というか母さんは一体何の職業を選択してたんだそれ？」

『ふむ。そういえば姉さんに私のギルドを姉弟喧嘩の腹いせに叩き潰されたな』

母さん!?

『当時の最大派閥だったんだがな・・・』

「あーさーんッ!？」

思わず母の方を見るがその年齢を感じさせない若々しい姿が妙に恐ろしい。

父さんの方を見れば「そーいや僕のやってたMMOにも似たような事件が・・・あれ母さんだったのか・・・」とか妙に納得してた。その事実を納得できさせるってアンタ達の交際時代ってどんなだよ。両親のなれ初めに少々頭を抱えなくなったがそれは置いておいて。

「と、ともかく俺自身にあまり興味が無いんだ。飯とか洗濯とかしないといけないしゲームにできる時間なんてあまり無いんだ」

『一時間もかい？』

「いやいろいろ削って三時間くらいは確保できるかもだけど、平日の一日三時間じゃね、時間〓強さみたいだし」

小学校時代のクラスメイトでも強くてもてはやされている奴は一日六時間くらいやっていたらしい。

しかもそれでも上位の連中には届かなくて、そいつらは一日十時間以上やっている廃ゲーマー。

ゲームには楽しみ方がいろいろあるとはいえ強くならなず向上心も少ない奴はゲームの邪魔になるだけだろう。

『三時間もあれば平気さ。そのゲームシステムには時間加速が入っているからね』

「時間加速？」

『そうそのゲーム内の時間の24時間は、現実世界の一時間というわけさ』

「へえ」

確かにニュースでもそういった技術が開発されたことを発表していた。

たしかにそれなら時間が取れない人間でもじっくりゲームができるだろう。
しかし

「結局、時間をかけて強くなるのは十時間とかやっている奴じゃな

いか？」

結局それに変わりはない。
むしろ実質時間の差が長くなるだけだ。

『大丈夫。そのゲームは健康上の理由を考え、8時間ログインしていると強制的にログアウトされてその後、6時間はログインできないんだ。同様理由で連続ログイン時間 - 2時間はログアウト後ログインできない。だから危惧するほどの差を出ないさ』

映像内の叔父さんが笑う。

それでも俺は迷う、別にVRMMOを毛嫌いしているわけでは無いけど。

のめり込んで両親に迷惑をかけたくないのだ。
無意識のうちの左右の両親に視線を向ける。

「ぼくは別に修がわがまま言ってくれるくらいの方がいいさ。 正
直、あまりに大人だよお前は」

父さんはそういつて頭をなでる。

さすがに今年から中学生の身としては少々照れくさい。

「私もね。だってあなたはまだ家にあまり友達呼んだことないじゃない。この際年齢差はいいからもっというんな人と友達になってもいいのよ」

母さんは笑顔で告げる。

ぐっと心に来た。

これが感動なのか、それとも友人の少なさを指摘されたことからきているのかは不明だけど。

『そうさ、我が甥よ。ゲーム内でしかできない体験をしてみなさい。【全てを世界は受け入れる】それがそのゲームコンセプトだ』

叔父さんのダメ押し。

ここまで言われてもNO言える人間じゃないさ、俺は。

「分かった。じゃあ俺やってみる」

中学一年直前、13歳の誕生日、俺はVRMMOを始める決心をした。

『そつえばお前の元許嫁もするらしいぞ、それ。会えるといいな』

叔父エ……、やる気が一気に失せたよ、なぜか。

1話 誕生日とプレゼントと中学生（後書き）

VRMMOとか全然してない、タイトル詐欺ってますね。

今回は電腦世界へプラグインです。

2話 キャラメイクとスキルと初戦闘（前書き）

説明回的なものです。
長いかもしれませんが。

2話 キャラメイクとスキルと初戦闘

『キャラクターメイキングをしてください』

脳内で響く電子音声。

すると同時に真っ暗闇だった空間内に鏡が現れ目の前にパンツ丁の青年が登場する。

「これが俺か・・・」

当たり前だがベースは実年齢よりも年上だ、二十代前半だろうか？
ふむ、どうするかな。

とりあえず目の前のイケメンの俺とにらみ合いながら俺はこの世界での分身の造形を考えていた。

叔父からの最後の一言でやめいようかとも思ったがなぜか両親からも強い勧めのせいで結局サービスの開始日と同じ日に始めることになった。

その前に調べた情報によればこのゲームはかなり期待の新作で初回の30万本も既に売上が決定的だという。

というか30万ってなんだよ。少子化がどうにか落ち着きを見せ始めて人口の回復が始まった日本とはいえ、国民の四分の一も買ったのか？

しかしその俺の推測は違うらしい。

どうやら自国版の翻訳機能を搭載したものを待ちきれない外国人たちが半分近くを買ったらしい。

21世紀後半からの新文化主義の為、20世紀からアニメ・ゲームの大国と知られる日本は結構人気。

翻訳機が実装され始めたとはいえ、微妙なニュアンスの違いを学びたい外国人も結構いるため第二、第三言語としての日本語の需要は伸びた。

だから今回既にゲームを購入した外国人も翻訳機能なしのものでも良いのだろつ。

とりあえず調べた限りのゲームの情報を羅列すると。

・スキル取得し熟練度を上げることレベルアップ。　スキルはそれに準じた行動をとることで取得、熟練度できる。

例：街中で引き籠って鍛冶をしても鍛冶スキルが上がるのでレベルは上がり強くなれる。

・スキルは種族によって得られないものが有ったり、熟練度の上がり具合に違いある。

例：魔法スキルは鬼族は取得不可、そのかわり近接系の熟練度伸び具合が早い。

・アーツは武器系のスキルを上げること得られえる技。

例：両手剣スキルを上げることで【一刀両断】というアーツが。

・アビリティはスキルを得ること得られる特殊能力のうようなもの。

例：跳躍スキル上げること【壁蹴り】というアビリティが。

・レベルアップ時に18与えられる能力値を

L I F (体力)

S T R (筋力)

A G I (敏捷)

D E X (器用)

D U R (耐久)

M A G (魔力)

に割り振って自分好みに育てる。

初期は180与えられるのでそれを適当に割り振るらしい。

・世界は地球の1/6程度のマップ。大陸が三つ、海：陸は6：4、プレイヤーはまずランダムに初心者用の町に飛ばされるのでそこから好みに動いて拠点等を決める。

ほかにもいろいろ公式や、その他のスレッド等で確認したがとにかく自由度が高いことが分かった。

種族とかよくわからない数あり、スキルなど代表的なもの以外は不明でいったいどれだけ数があるかも謎だ。
というか公式サイトで

『スタッフの悪乗りが過ぎました。だって予算も人も凄いあるんだもの』

ってなってた。

どういうことだ!?

とか思ってたらとあるサイトで『スプリングが小国家並みの融資をした』とかなっていた。

叔父エ……。

しかも母さんの話では開発スタッフの多くが叔父さんの個人的な友人が多いらしい。
つまり叔父さんみたいなよく分からないノリの人間が作ったってことだ。

あれ……不安しかない……。

「とか思ってるわけにもいかないよな……」

俺は回想に入っていた頭を引き戻し、まず種族選択をはじめめる。
前調査自体は情報量の多さに結局途中であきらめた。

「まずはこれが【ヒューマン】」

目の前に自分は、現実とは違うとはいえ普通の人間だ。

「次【エルフ】」

横の画面をいじると、そこには耳が細長くなり少しだけイケメンになった俺。

「けっこうスタンダードだな、次【ダークエルフ】」

更にいじると肌の色が変わり白から黒へ。

「【ドワーフ】」

背が低く、顔もおっさん風に。

「【サラマンダー】」

全身が赤々と燃える熱血そうな男に。

「【ウィンディーネ】」

耳が伸びヒレ見たく、肌は青くなる。手には水かきも見える。

「【鬼】」

筋肉質かつ、目つきが悪い。あと頭に小さく角が生えている。

「ふーん、とりあえず一通り見るかな・・・」

俺はそのまま次の種族を選択する。

「次」

「次・・・【アーマード】」

SFちつくな全身装甲、ファンタジーな世界では結構浮きそうだが、
っていうか

「どんだけあるんだよこれ!？」

既に二十は超えた。

慌てて選択画面をチェックすると目の前には五十以上の種族。

前に調べたときより明らかに増えてる!？」

というか今まで見た中には明らかに方向性がかぶっているものがあった。

【トリトン】と【ウィンディーネ】とか

【バードマン】と【烏天狗】とか

【エルフ】と【ダークエルフ】もよく考えたらそつだ。
たぶんいろいろ差別化されているんだろつが。

「ともかく全部見てたらきりがないな・・・」

こつなつたら!

「種族名と直感で選ぶぜ!」

どうせ見ても簡単な説明と見た目ぐらいしかわからないのだ。

しかも完全VRMMO素人の俺にとってはどんなタイプを選ぼうがあまり関係ない気もするし。

とりあえずは全てを流し読む。

高速でスクロールを実行し、瞬間記憶の要領で頭に残った文字をもフラッシュで現れては消えてを繰り返す。

【リザードマン】

【ウォーバニー】

【雷子】

【ウィンド・ノービス】

e t c

「よしとりあえずこれだ！」

気になったそのボタンを押す。すると目の前の鏡に映る俺の分身は姿を変え

横に種族名が表記される

【カルマ】

そう表記された種族は見た目は薄く紫がかった肌。

耳は長くはないモノの尖っている。
ちらりと見たただけでは血色の悪い【ヒューマン】に見えないこともない。

しかしそれ以上に目を引くのは

「刺青・・・？」

体の右半身全体を奇抜な文様の刺青が入れられている。

「ふーん、これでいつか」

何と無く面白そうだと決定。

正直【ヒューマン】でもいいがそれだと普通すぎるのでまあいいだろう。

ちなみに性別は種族前に決定している男だ。

そもそもVRMMOは現実世界との折り合いからあまり異性を選択する人間は少ない。

初期のころはごまんといたらしいが現実と仮想の体の齟齬がそのまま不快感につながってしまうらしくプレイ中や現実で体調不良を起こすものが多いため、効率を優先するゲーム内では自然と淘汰されたらしい。

今でも少数ながら存在するがかなり珍しい。

ちなみにすたれたもう一つの理由としてNPCたちが普通に美人、美少女だということのも大きく働いたらしい。

「あとは身長とか細かい設定を」

種族を決めた俺はそのまま設定いじっていく。

身長は170後半、細めの、容姿は俺が少し年取ったくらいにして

おいて。

ついでに無精ひげでも生やしておくか。

俺は脳内で昭和から続く特撮ヒーローの最新版を歌いながら、仕上げていく。

なぜその歌かと言われれば、イメージ的に自分を変身させているためだろうか。

別に昆虫型ではないけど。

ちなみに昆虫型と思われる【インセクター】って種族もあったりした。

とかそういうしているうちに出来上がった。

そしてそこにいたのは

「あれ叔父さん・・・？」

イケメンではないもののその姿はなぜか叔父さんっぽくなった。むしろ顔は父さんを若返った感じに。

平凡な顔の二十代。

なぜいまだに美人な母とこんな平凡な父が結婚できたのか謎だ。しかし今俺にとってはそんな疑問以上に

「俺は将来こうなるのか・・・」

自分の先に少々不安を覚えた俺だった。

『Welcome to World』

脳内に音声が響くと共に目の前がまぶしく光り、空間が割れる。
同時に眼前に出てきたのは

「村・・・?」

村だ。

どう見ても中世ヨーロッパ風の村。

辺りではNPCと思われる人々が歓談したり、あくせく働いている。
それを確認した後自身の装備を確認してみる。

【Name: シュウ・リヴ1】

【Skill】

Nothing

【Stamina】

100/100

【Arts】

Nothing

【Ability】

Nothing

【Potential】

L I F 50 / 50
S T R 23
A G I 34
D E X 32
D U R 28
M A G 14

【Your Title】

Nothing

【Equipment】

頭：旅立ちの耳飾り「DEF：3」「WEI：1」
胸：旅立ちの衣「DEF：8」「WEI：2」
腕：旅立ちの手袋「DEF：6」「WEI：1」
腰：旅立ちの腰巻「DEF：5」「WEI：1」
足：旅立ちの下履き「DEF：7」「WEI：2」

【Weapon】

Nothing

【Weight】

7 / 300

とりあえず防具は初期装備が創部できるようだ。
そのまま辺りを再確認。
すると村の入り口らしきものを発見。
試しに歩いてみるとそこには

【トルテの村】

「トルテの村？ 多分中央大陸かな」

前の情報によれば、中央、西方、東方の三大陸に分かれていたはずだ。

中央が西洋風、西方が南洋風、東方が東洋風。

これに当てはまれば村の様子は西洋風、恐らく中央の初心者用の拠点の一つだろう。

正直かなりリアルで驚いている。

近くで井戸端会議に興じるNPCなど本物の外人のおばさんたちに見える。

「ともかく今は武器とお金かな」

というか初期にお金ってないんだな、割と面倒かもしれない。

俺はそんなことを思いながら村の中を歩きだす。

キョロキョロと目を動かせば

【アーリー商店】

【ハンナの薬屋】

【鍛冶屋グラン】

【フェンベルの魔法店】

などなど、冒険に必要と思われる店が見える。

しかし金が無いのでどうしようもない。

いっそのこと防具を売って金を作るか？

いくら初期装備とはいえなければなしのお金にはなるだろう。
ネットで見た話では、別ゲームでは裸一貫で上級者の一人とかもい
るらしい。

案外ありか？

とも思ってたがよくよく考えたら序盤からパンイチ生活などしたくな
い。

どうしようかなー。

俺が街角で頭を悩ませていると。

「へー、これがワールド・オンライン内か」

「結構リアルじゃね？」

「わー、この犬とかすっごいモフモフしてる！！」

声が聞こえたので慌てて物陰に隠れて……って何で隠れてんだ？
セルフ突っ込み。友人少なさゆえに身についた俺の現実世界のス
キルである。

……悲しくってきた。

俺はとりあえず声の方に目を向けるとそこには【リザードマン】の
大男と、【ワータイガー】の小柄の男、そして【ウインディーネ】の
女性が犬を撫でていた。

ちなみにな犬を撫でているのは女性だけだ。

他の二人は犬に警戒されている。

種族のせいかな？

「いままでやってきた中でもトップクラスだな」

「いいんじゃないね、マジでこれ徹夜した甲斐あったんじゃないね」

「うん、かなり感触もリアル。嗅覚の方はやっぱり無いけど」

どうやら元から三人とも知り合いであるらしく親しげにワールド・オンラインの出来について話し合っている。

VRMMO上級者だ・・・。

俺は物陰から観察しつつ、そう思った。

しかもあの話し方からするとかなりいろんなものをやりこんでいそうだ。

徹夜つてのは徹夜で発売日に買ってきただってことかな？

素朴な疑問が浮かぶが今はそんな【ワータイガー】の小男の事情とかどうでもいい。

「聞きに行くか・・・？」

そう重要なのはそれである。

正直上級者がいるならVRMMOの簡単な歩き方とか教えてもらえたら嬉しい。

あとついでにこの先も仲良くVRMMOの仲間としてやっていけたらなお嬉しい。

いくか？

脳内でGOサインが出かけるがそこに別なところから待ってたがかかる。

よくよく考えれば彼らもこのゲームは今日が初めてのはずというこ

と。

知り合いで楽しくやっていると知らない奴が、ずっずっしく聞きに来るのはどうか。

脳内で軽くシミュレーション。

・・・迷惑でしかないな。

俺はそう結論づけ、この後どうするかを少しだけ思案。

「とりあえず始めだけ後をつけてやり方を習うか」

ポンと手を打って決定。

決めたらさっそく実行、みれば三人組の方でも話し合いがまとまったのかどこかに向かうらしい。

すぐに後を追わねば！

そこから俺は不審者よろしく壁伝いに後を追いつめた。

『ポーン！ スキル：【隠密】を取得しました』

『ポーン！ 【隠密】の熟練度が2になりました』

脳内で本日2回目の電子音が鳴る。

どうやら三人組を付け回している間にガンガン上がっているらしい。これが行動すると得られるスキルって奴か。

一番初めなったときは驚いて声を上げかけた。

というかこの電子音は脳内で上がったプレイヤーにしか聞こえないものらしく、三人組は全く気付かず이었다。

そして三人組を付け回すこと小一時間、遂に3になってしまった。

何か知らんが悪いことしている気分。

三人組はどうやらNPCに話しかけまくって情報を集めているらしい。

しかもその会話の中でもスキルをゲットできているらしい。

何故わかるかというところといった声が聞こえたからだ。

「スキル：【交渉】だと。本当に何でもアリだなスキルって」

「なんでお前ばかり取ってるじゃん。次俺が交渉するじゃん」

「私も犬撫でまくってたら【トリミング】とったー」

俺も君ら尾行して【隠密】とった。

とかいって出て行ったらあの【ワータイガー】の人にぶん殴れそうだな、彼だけ何も取ってないみたいだし。

というか君たち早く動いてくれよ。武器当たりの取り方とか俺はさっさと知りたいんだけど。

いや別に君たちになが楽しそうなのに俺が一人だけだからつらいとかじゃなくて。

丁度、小学校の時のクラスを思い出すとかは全く関係なくて。

俺は純粹に早くゲームをはじめたいんだよ。

楽しそうな三人組を眺めながら俺がだんだん惨めな気分になりつついると

「あ、あなた誰です？・・・」

真後ろから声をかけられた。

「!？」

びっくりして振り返れば若い女性が洗濯かごを抱えてこちら見ていた。

格好から察するにNPCだ。

しかしこの世界のNPCはそれぞれが高度なAIを積んでおり、この世界の住人といっても過言でないらしい。

つまり普通にこの村で生活を営む一般人の女性、彼女から見た俺とは何か？

不審者だ。

場所を確認すれば彼女の家と思われる玄関のすぐ前だった。

あっ、やっべ。

「えー、あの一」

脳内で響く危険信号、俺は愛想笑いをしながら女性を見る。美人である、見ただけで作成者の趣味が分かるような。

ってそうじゃなくて!!

どうする!?! どうする!?!

正直に尾行してましたとか言えるわけない。

となれば真実味があってもっとそれっぽい言い訳を言わねば!そこで俺は尾行前のことを思い出す。

そうだ、そうだよ。

俺がそもそもしたかったのは彼ら付けることじゃない。

ましてやそれで惨めになることでもない、俺はMじゃないのだ。俺が欲しかったのは冒険に先立つもの。

プレイヤーとして何としても確保したいもの。

俺はにこやかな笑顔を作り女性の方を向き直るところ言った。

「お金と武器を探してまして」

結果として俺は女性の悲鳴を受けとることになった。



『ポーン！ 【棒術】の熟練度が4になりました』

脳内に響く電子音を無視し、手に持った鉄製の棒を振るう。

同時にそうすることで前方から飛び掛かってきた【リザードマン】と【ワータイガー】の二人を薙ぎ払う。

どうやらまだ戦闘系のスキルを得ていないらしい二人は俺の攻撃を直撃。

吹っ飛びはしないもの俺に対する攻撃は防げたようだ。

「盗人のくせにやるな」

「いいじゃん。初PKじゃん」

二人は楽しそうに会話しながらそれぞれの獲物構える。

【リザードマン】は両手斧、【ワータイガー】は籠手。

「どうしてこうなった・・・」

俺は自分の獲物である鉄棒を構えながら、腰を落として構える。

前で構える二人は俺に比べれば余裕そうだ。

まあ同レベル相手に2対1、いや・・・

パシユ、と小さな音を拾うと同時俺は後方へ飛ぶ。

瞬間、バシユン！ と音と共に俺がいた元いた地点に水の弾丸が突き刺さる。

「3対1だったな・・・」

水系初級詠唱魔法【スプラッシュ】だったか。

俺は木の陰に隠れて見えない【ウィンディーネ】の女性に舌打ちしながら、再び突っ込んできた二人の男を相手取る。

ホント、どうしてこうなった・・・。

「きゃあああああああああああああああああー!!」

女性が悲鳴を上げると同時に村中が反応。

俺が弁明する暇もなく手に思い思いの武器を持た村人たちが女性を助けようとやってきた。

鉄製の鍬と鎌って普通にやばい装備じゃね？

さすがに素手ではぼこぼこにされることを悟った俺はおもわず近くにあった鉄の物干し竿を手にとって軽く応戦。

するとそれを抵抗と受け取ったのか村人たちは更に苛烈に攻めてきた。

本業ではないためかそこまで強くない。
素人の俺でも棒を振りまわしてどうにかなる程度だ。

とはいえ

「数が多い！」

棒の端を持って大きく薙ぎ払い。

手元に引き寄せ、連続突き。

ともかく思い付く限りの棒で人を押しつけられそうな行為をしながらどうにか村からの脱出を図る。

目指すは後方300M先の村の入り口だ。

『ポーン！ スキル：【棒術】を取得しました』

脳内で陽気な電子音。

つーか、これもスキルになるのかよ！！

突進してくる村人を棒で押しつけながら心の中で突っ込み。

「でもこれならどうにか抜けられるか・・・」

絞り出すように声をだしながら体を軸に回転。

スキルで扱いがうまくなったせいか先ほどよりも威力が上がっているらしい。

『ポーン！ 【棒術】の熟練度が2になりました』

熟練度共にさらに上がる攻撃速度。
どうやら棒術はそもそもが一对多に優れているようだ。
俺はスキル共に棒術というもの理解する。

急所を突いて攻撃するのではなく、相手の攻撃の起点をつぶし防ぐ。
足運びを邪魔してバランスを崩させる。

基本を払いで、隙があれば攻めの突きを。

起点つぶしはや足払いで体勢を崩せば集団は一気に瓦解していくれる。

とつさに手に取ったとはいえ相当に使える武器だ。

欠点といえば、殺傷力が低い点だがそもそも俺は村人を殺すつもりはないので今は好都合。

運がいいのか悪いのかは分らんがこのまま突っ切る！

「よし、いつ!?!」

残り100Mとなった瞬間それは起こった。

パシユン！ という聞いたことが無い音そして目の前に飛来する謎の物体。

鉄の棒で払えたのは正直運が良かったとしか言いようがない。
同時にかかる水しぶき。

「これは水の魔法・・・?」

なぜか直感でそう悟った。
そしてそれに応答する声。

「そうー。魔法特化系種族は初期から魔法を持っているのー。それは水系初級詠唱魔法【スプラッシュ】ー」

間延びした声共に現れる【ウィンディーネ】の女性。

同時にその背後から一つの影が飛び出し来る姿が

「イベントかと思ったらプレイヤーだったじゃん」

小柄の体を丸めファイティングポーズで突っ込んでくるのは【ワータイガー】の男だ。

AGIに大きく振っているのだろうか、一瞬で肉薄し連続で拳を突き出す。

「おお・・・!!」

体を反らしつつ回避。

棒を振るって【ワータイガー】に攻撃を仕掛けるも簡単に回避される。

「悪いが契約を結んでね」

体勢を立て直そうとした矢先、側面から巨大な影が迫る。

目を向けるより先に棒を構えガード。

ズン！ とも重たい衝撃が体中を突き抜ける。

「君を倒せば、武器と金銭を工面してくれるそうだ。 悪いが倒れてもらおう」

視線を上げれば【リザードマン】の大男。
その姿に遜色ない力で両手斧を俺の鉄棒を折り砕こうと力を込めていた。

「やっかいだなあ！！ もう！」

嘆きを漏らしながらも斧の刃を棒の表面で滑らせ、攻撃圏外へ導くと同時に斧を弾きあげる。

そして距離を取るとNPCでない三人組を見据えて構える。

始まって数時間（実時間は数十分）で対プレイヤーってどういふことだよ。

『ポーン！ 【棒術】の熟練度が3になりました』

脳内では陽気な電子音が場違いな音で役目を果たしていた。

2話 キャラメイクとスキルと初戦闘（後書き）

ヒロインの女の子とかが出てくるか今のところ不明。
しばらく主人公の一人奮闘劇が続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2433ba/>

VRMMOのある日常

2012年1月10日00時48分発行